

災い忘れず、備え広める 東日本大震災で被災の「ママ防災士」



柳原志保さん（左）と小学5年生になった次男拓巳君（右）＝2月26日午後、熊本県和水町

東日本大震災で被災し、2012年に宮城県多賀城市から熊本県和水町に息子2人と移住した柳原志保さん（44）が、「歌うママ防災士」として母親目線の防災術を伝授する講演を各地で行い、回数は150回、参加者は1万人を超えた。地震への備えもなく、支援を待つだけの被災者だった東日本大震災。昨年4月には熊本地震を経験した。「今こそ、経験と教訓を伝えなきゃ」。大震災から6年となる11日には、ある仕掛けも計画している。

11年3月11日午後2時46分。次男拓巳君を迎えに、車で保育園に向かっていた。突然、激しい揺れが襲う。園庭で待っていた拓巳君を乗せ、自宅で小学1年の長男惟純（いずみ）君、母親と合流。着の身着のまま高台の小学校に逃げた。

さっきまで車を走らせていた道路には津波が押し寄せていた。2週間の避難生活。「ただただ助けられて乗り切った。津波が来るという発想すらなかった」

当時、支配人を務めていた仙台市のビジネスホテルは工事関係者らで満室。息子たちを母親に預け、ホテルに住み込んで必死に働いた。しかし、息子は2人とも「そばにいて」と泣き続けた。「母親は私しかない」。思い切って退職し、12年4月、妹が住む和水町に移住した。

この年の10月、子どもが通う小学校の保護者に東日本大震災の体験を話す機会があった。「地震を人ごとのように思っている」。そう感じ、防災を伝えようと決意した。14年9月には防災士の資格を取得。婚活アドバイザーとして働きながら、防災術を伝授する講演を重ねた。

救助を求める笛は100円ショップで買える。避難所では子ども服や下着は手に入りにくい。ため、すぐ持ち出せる場所に保管しておく。中身が入ったツナ缶に糸状によったティッシュを浸して火を付けると、ランプ代わりに。折り畳んだ新聞紙はスリッパになる。「これならできる」と思ってもらうことが狙いだ。

そんな中で起こった熊本地震。講演の依頼は急増し、この1年で計100回。だが、気掛かりなのは熊本県内でさえも地域によって地震や防災意識に大きな温度差があることだ。

災いを忘れない「忘災」のメッセージを込めて、講演では必ず東日本大震災の復興支援ソング「花は咲く」を歌う。東日本大震災から6年を迎える11日には、町内の婚活イベント会場で緊急地震速報のサイレンを響かせる計画だ。「楽しい時だって地震は突然やって来る。私がまいた種から、たくさんの防災の芽が出てほしい」。